
竜と虎の甲子園

後藤 能巳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜と虎の甲子園

【Nコード】

N7885W

【作者名】

後藤 能巳

【あらすじ】

全国中学校野球大会の1回戦で対戦した竜一と一虎。やがて二人は長崎県の五島高校という、ど田舎の、野球では無名の高校へ進学する。甲子園出場を目指す竜一と甲子園優勝を目指す一虎。

田舎育ちで純粋な竜一と都会育ちで超前向きな一虎。

長崎県五島列島を舞台に、険しくも輝かしい夢を追いかける青春学園ストーリー。

第1話

「高山先輩、ピッチャー疲れてますよ。長打狙っていきましよう。」
三塁側のベンチから大きな声が高山一虎たかやますとらに届いた。

（確かに疲れているみたいだが、球は走っている。一回戦からこんなすごいピッチャーと対戦できるなんて思ってもみなかった。）

西東京都代表、町田市立奥浦中学校のエースで4番の一虎は、この勝負を楽しんでいた。

最終回の7回表2アウト、ランナー1塁、2ボール1ストライク。

相手は長崎県代表、五島市立富江中学校のエース、黒瀬竜一くろせりゅういち。

（しかもあの顔、あの体型・・・、みんなが言うとおり瓜二つだ、この俺と！・・・なんて、感心している場合じゃないぞ。必ず長打を決めてやる！）

ゲームは4対1でリードしているが、相手のピッチャー黒瀬竜一を打ち崩したわけではない。

フォアボールや盗塁、送りバントなど、エラーを誘うような駆け引きのうまさで積み上げた4点だった。いかにも試合慣れしている東京都のチームらしい。対する富江中学校は一虎の速球に散発4安打に抑えられていた。

竜一が振りかぶって投げた。

カキーン！

打球は三塁ベースよりもわずかに左。

竜一はふうつと息を吐いた。

（よし、追い込んだ。次は高めの速球で空振りだ。）

キャッチャー田尾のサインも「高めの速球」。

バッターボックスの一虎の顔が目に入る。

(でも、こいつ本当に似とるな、この俺と。)

サインにうなずいた竜一が高々と両手を挙げて振りかぶった。

(俺にそっくりなこいつを三振に取って……、9回裏に同点、いや逆転だ。)

右足が上がる。竜一はサウスポーだ。

(まずい、ボールが！)

左の腕がしなる。だが、ボールが少し滑って握りが浅くなってしまった。

(何とかまつすぐ飛んでくれ！)

竜一は渾身の力を込めて投げた。

ガッ！

ボールがキャッチャー田尾のマスクを直撃した。

田尾がすぐにボールを追う。

ボールは一塁側のベンチの方へ。

「ストライク！」

審判がコールしバッターの一虎を見た。

ファーストに走れば振り逃げが成立するからだ。

しかし一虎はバットを構えたまま力なく虚空を見つめていた。

田尾がボールに追いつきファーストへ放る。

「アウト、スリーアウトチェンジ！」

一虎は三塁側のベンチに帰る竜一の後ろ姿を見送りながら、ゆっくりと一塁側ベンチへ向かった。

「どうした一虎、あんな真ん中を見逃すなんて、おまえらしくないな。」

監督が、控え選手からグローブを受け取った一虎に話しかけた。

「はい、その、なんていうか……、びっくりしたものですから。」

「びっくりした？」

「あんなボール、今まで見たことないんで。」

「何？ いったい・・・」

一虎は不思議がる監督の言葉を最後まで聞かずにマウンドへ走った。

「あーびっくりした！ 何かあのボールは。バウンドしそうなくらい低いち思ったとに、すごか勢いで浮き上がったぞ！」

ベンチに戻った田尾が竜一に詰め寄る。

「うん、はっきり言って俺も驚いた。何ちいうか・・・、まさに魔球やな。」

そう言うと竜一は奥の方のベンチに腰かけた。

「一体どうやって投げたつか？」

「さあ。」

「さあって、覚えとらんの？」

「・・・そんなことより、ネクストバッターズサークルに行けよ、ワンアウトぞ。」

「おっ、そうやった。くそ、最後のバッターになってたまるかっての。」

田尾がバットをつかんでベンチを飛び出した。

(本当に、一体どうやって投げたとやろう・・・)

竜一は腕組みをしてベンチの天井を仰いだ。

第2話

「ストライク、バッターアウト。ゲームセット!」

田尾は心配していた通り最後のバッターになった。両チームと審判がホームベースを挟んで整列する。

「4対1で、奥浦中学校の勝ち」

「ありがとうございます!」

帽子を取ってあいさつした両チームの選手たちは、相対する選手と握手をした。

竜一と一虎はどちらもキャプテンなので審判側の一番前に並んでいる。

「あれ、君左利きだろ?」

左手を差し出した一虎が、右手を出した竜一に尋ねた。

「え?そういう君は右利きでしょ?」

二人は同時に別の手を出した。

一虎が右手を、竜一が左手を。

「ぶっ。あははは。」

思わず一虎が笑う。

竜一は「ぶっ。」と軽く笑って手のひらを相手の肩口に挙げた。

一虎はその手のひらに出していた手のひらをパチンと当てた。

ハイタッチ。

「後で話せないか?」

一虎は自分が三振にとられた最後のボールのことを問いただしたかった。

「え・・・?う、うん、わかった。後で。」

竜一はそう言っているとチームメイトに続いて相手のベンチに走った。

相手のベンチに挨拶した後、自分たちのベンチ裏スタンドに挨拶。その後監督から長話を聞くのがいつものパターンだ。

だがこの日の監督の話は極端に短かった。

「夢にまで見た全国大会。1回戦で敗退したとはいえ、名門の奥浦中学校と互角に渡り合った。まあ、点差は3点も付いてしまったが、内容は互角だ。胸を張って帰っていいと俺は思う。技術的なことや今後のことは今晚の打ち上げ・・・いや、反省会で話す。じゃあ、後片付けをして帰るぞ。」

竜一は奥浦中のベンチへ走った。

一虎がすぐに気付き迎える。

二人はベンチ裏に歩いた。

「ごめんな。あんまり時間ないんだろ？」

ベンチ裏にある階段に腰掛けながら一虎が言った。
隣に腰掛けながら竜一がうなづく。

「最後の球だよ。」

「え？」

「あんな変化球は見たことがないし、聞いたこともない。落ちる球じゃなくて浮かび上がる球なんてさ。いったい・・・」

「ライズ。」

「え？」

「変化球の名前、ライズっていうとき。ほら朝日のことをサンライズっていうやろ？サンは太陽、ライズは上るってことやけん、浮かび上がるあの球をライズって名づけたとよ。」

言いながら竜一は吹き出したくなるのをこらえていた。

あの玉はあの時だけ偶然に投げられたもので、もちろん名前を付けてなどいない。

ライズというのは9回裏の攻撃のとき、ベンチでふと思ひ浮かんだものだった。

おそらくはもう二度と会うことはない、自分とそっくりな顔のერთ野球少年をからかってみたくなったのだ。

「ライズか。すごい球だった。なあ、どうやって投げたんだ？握りは？それにどうして最後の一球だけしか投げなかったの。」

「投げ方は企業秘密。一球しか投げなかったのは・・・キャッチャーも捕れんからさ。捕れんってわかっていただけで全国大会の記念一球だけ投げてみたかったとやもん。」

「そうか。そうだよな。苦労して身に付けた新しい変化球を、そう簡単に教えられないよな。」

竜一は一虎の感心する表情を見て、笑いだしたい衝動を抑える限界を感じ、いきなり立ち上がった。

「俺もう行かんば。」

「あ、うん。なあ、俺は日大三高に行くんだけど、君はどこに行くんだ。」

「俺、五島高校。」

「ごとう高校？聞いたことがないな。長崎では強いのか？」

「いや、たぶん一度も甲子園に行ったことがなからうね。」

「なんだって！」

急に一虎が大声を出したので、ほほが緩みがちだった竜一の顔が引き締まった。

「なんでそんな無名校に行くんだよ。有名校から誘いはないの？いや、誘いがなくなっただって君の力なら有名校のエースになって甲子園で活躍できるかもしれないのに。」

「俺、五島っていう小さな島におばあちゃんと暮らしているけん、簡単には島を離れられんとよ。でも五島高校にでん野球部はある。

甲子園も夢じゃなかよ。じゃあ、もう俺行く。奥浦中の全国優勝祈ってるけん。」

竜一は一虎に手を振りながら走っていった。

後ろ姿を眉をひそめながら見つめる一虎。

「こつちが本物のトラ、だよなあ・・・」

一虎の前に奥浦中で1番セカンドの荒川拓巳が現れた。

荒川はパワーこそないがミートがうまく、俊足でその上守備もつまり、いわゆる天才肌の選手で一虎の親友だ。

トラは一虎のニツクネーム。

「あたりまえだろ。確かに似ていたけどね。」

「どうしたの？深刻そうな顔しちゃって。」

「もつたいたいと思わないか。あれほどのピッチャーなら、甲子園でも活躍できそうなのに五島高校っていう無名校に行くんだってさ。」

「ふ〜ん、でもそれもちょっとおもしろそう。」

「えっ？」

「五島つて長崎県の離島だろ。島の無名校が甲子園で旋風を起こす。日大三校を破つて全国制覇！とかね。・・・でもまあ、あり得ないか。そんなに高校野球は甘くないってね。」

荒川は笑いながら一虎を見た。

（離島の高校が甲子園全国制覇・・・か。そんなことができるんなら、確かに面白そうだ。）

深刻そうな顔をしていた一虎が一瞬ほほ笑んだ。

第3話

「相手のピッチャーはなかなかいい球を投げていたようじゃないか。」

「ここは全国大会が開催されている和歌山市の旅館。」

夕食を終えた一虎は、両親の部屋に来ていた。

父、雅彦は缶ビールを飲み、母、洋子は大浴場に行っている。

「すごいピッチャーだったよ。信じられない球を投げるし……。でも、ピッチャーだけじゃ勝てないからね。チームの総合力からいったら俺たちの方が一枚上手だったってことかな。」

「おっ、なかなか言うじゃないか。」

「でも俺、あのピッチャーの球をシンでとらえきれなかったんだ。ヒットにはなつたけどまたまた野手のいないところに飛んだだけでさ。いつか、もう一度対戦したいな。」

「最後の打席は三振した後、どうしてすぐに走らなかったんだ？」

「ああ、あれね。びっくりしたんだよ。そう、びっくりして振り逃げに気付かなかった。思い出すと今でも鳥肌が立つよ。だって、明らかに低いと思って見送ったら急に浮き上がってきたんだから。あんな球、絶対に打てないよ。そうだ、もう一度対戦したいってさっき言っただけ、あれは取り消すよ。よく考えたら同じチームの方がいい。」

「トラがそこまで相手のピッチャーをほめるとはなあ。長崎県の五島だろ？あんなちっぽけな島によくそんな逸材が現れたもんだ。」

「父さん、五島を知っているの？」

「ああ、一度行ったことがある。母さんと一緒にね。あれは……。そう、トラが生まれて間もない時だから、13年前くらいかなあ。」

「何をしに行ったの？」

雅彦は一虎の質問に少し動揺した。

「言わないでよいことを言ってしまったと反省したが、今さらどうしようもない。」

「それは・・・そう、母さんのお姉さん、トラにとっては伯母さんになる人が住んでいたからね。」

「えっ？五島に伯母さんが？初めて聞くと思うんだけど。」

「そうか、言っていないかったか・・・。」

雅彦は持っていた缶ビールをソファの前のテーブルに置いた。

「父さん達が五島に行ったのは、その伯母さんの葬式があったからなんだよ。」

するとその時、部屋の扉が開いて、母、洋子が入ってきた。

「あら、トラちゃんが来てたの？母さんもビールを飲もうかしら。」

・・・どうしたの二人とも神妙な顔をして。」

洋子は中3の一虎をいまだにトラちゃんと呼んでいる。

「今日の相手が、長崎県の五島のチームだったろ？だから良美姉さんのことを少し話していたんだ。」

「・・・姉さんのことって？」

洋子が一瞬雅彦を睨んだように一虎には見えた。

「何も。ただ亡くなったってことだけさ。」

「そう・・・。まあ・・・そんな話は今はいいじゃない。せつかく一回戦を勝って祝杯をあげるところなんだから。」

そう言うと洋子は冷蔵庫からビールを出してコップに注いだ。

「勝利を祝してかんぱーい！」

ごくごくくとコップの半分くらいまで飲むと、一虎を夫婦の間に挟むように、洋子もソファに座った。

一虎は三人兄弟の末っ子で、長男は都内の大学の3年生、長女が高校2年生だ。

二人とも一虎の応援に来たかったのだが、学校や部活が忙しく同行することができなかった。

「あゝおいしい。ねえ、トラちゃん、体の調子はいい？肩やひじは痛くない？」

「大丈夫だよ。それよりさ、今日の相手のピッチャーなんだけど、母さん達、顔見た？」

「顔？さあ、スタンドからじゃよく見えなかったわ。顔がどうかしたの？」

「それがさ、そっくりなんだよね、この俺と。拓巳もびっくりしていたよ。」

「えっ・・・？」

「うわっ！母さんごぼれてるよ、ビール！」

「えっ？あら、やだ。」

洋子は手に持っていたグラスをひざの上に落してしまっていた。

「私としたことが、パジャマを着替えなくちゃ。」

そう言うと洋子は立ち上がり、着替えが入っているバッグの方へ向かった。

「で？そのピッチャー、名前は知ってるのか？」

雅彦が尋ねる。

「名前ねえ、確か・・・くろ・・・、そう、黒瀬だ。」

そのとたん、雅彦と洋子はお互いの顔をじっと見つめた。

第4話

「どうしたの二人とも、固まっちゃって。」

一虎は不思議そうに両親の顔をかわるがわる覗いた。

「トラ。」

意を決したように雅彦が口を開く。

「あんな、落ち着いて」

「待って！」

洋子が雅彦の言葉を遮った。

「トラちゃんは今日のゲームで疲れてるわ。お部屋に戻ってゆっくり休んで。」

「いや、ちょうどいい機会だ。いつかは話さなきゃいけないと思ってただる。」

雅彦は譲らない。

「でもトラちゃんはまだ中学生なのよ。」

「大丈夫。今のトラなら心を乱したりしない。」

「何を言っているの？そんな・・・思いついたように簡単に話さないですよ。」

洋子の顔はひきつり、両眼に涙があふれてきた。

「すまない。でもトラの顔を見てみるよ。今話をやめたってかえって混乱するよ。」

洋子は涙を指で拭きながら雅彦を恨めしそうに見つめた。

雅彦は、体を少し一虎の方にひねって座りなおした。

「トラ、落ち着いて聞いてほしい。」

「.....」

「黒瀬くん、名前は竜一というんだが、彼は・・・君の兄弟だ。しかも双子のね。そして君達2人を産んだのは母さんじゃない。さっき言った母さんのお姉さん、良美さんだ。」

一虎は身じろぎもせずじつと雅彦の話を聞いている。

「トラと竜一君は良美姉さんの最初の子どもだった。良美姉さんは嬉しくつてたまらなかつたんだろうね、毎日のように母さんに電話してきて、君たちのことを話していたよ。」

「.....」

「君たちが生まれて3カ月の時だった。良美姉さんとその旦那さん、光男さんは君たちが眠っている間に車で買い物に出かけたんだ。君たちをおばあちゃんに預けてね。」

「.....」

「交通事故だった。光男さんが運転する車に対向車がぶつかつてきたんだ。正面衝突だ。対向車は大型のトラックで、運転手が居眠り運転をしていたそうだ。光男さんと良美姉さんは・・・即死だったらしい。」

洋子はハンカチで目を抑え下を向いて立っている。

「葬式が終わつた後、君たちのことをみんなで話し合つたんだ。光男さんには兄弟がいなかった。おばあちゃんは君たち2人を育てたと言つたけど、生活が苦しいことはみんな知っていたから反対された。俺と母さんが君たち2人を預かりたいと申し出た。みんな賛成してくれたよ、おばあちゃん以外はね。」

「.....」

「おばあちゃんは、その5年くらい前に旦那さんを亡くされていてね、光男さんの家族が唯一の心の支えだったんだ。だから、君たち2人を手元に置きたくて仕方がなかった。でもパートのアルバイトだけで生活できるわけがないから、私たちに育てさせてくれと頼んだんだ。」

一虎の眼から一筋の涙が流れた。

だが涙はふかずじつと父の話を聞いている。

「親せきの人たちもそれがいいとおばあちゃんを説得したんだけど、おばあちゃんは首を縦に振らなかつた。そしてそのうち親せきの誰かから提案があつた。二人のうち、一人をおばあちゃんが育て、

一人を私達夫婦が育てたらどうかってね。」
「.....」

少し間をおいて雅彦が続けた。

「これが真実だ。いきなりこんなことを話されて、さぞびっくりしたことだろう。本当のご両親が亡くなっていたなんて。そして父さんや母さんが実の親じゃなかったなんてな.....」

雅彦はふうつとため息をついて続けた。

「だが、これだけはわかってほしい。私たちはトラを実の子と違って育ててきたし、その思いはこれからもずっと、ずっと変わらないということ。」

「そうよトラちゃん！あなたは私の子どもだからね！」
顔中涙でいっぱい洋子が一虎をぎゅっと抱きしめた。

「うん、わかってる。わかってるよ母さん。」

一虎が静かに頷いた。

第5話

「どうした、トラ。もうばてたか？」

荒川拓巳がセカンドのポジションから声をかける。

「7回まで一人で投げているのに、ねぎらいの言葉はないのかよ。」

一虎が額の汗を拭きながら顔をしかめた。

全国大会決勝、相手は神奈川県代表の松尾中学。

3対1でリードしているものの、最終回の7回裏2アウト満塁、しかもバッターボックスには4番の宇都宮。最大のピンチだ。

拓巳がマウンドに歩いてきた。

「教えてやるうか？スピードと切れがなくなったお前が、あいつを打ちとる方法を。」

一虎ははっと驚きながら拓巳を見た。

拓巳の言うとおり、すでにスピードも切れもない。

今日シングルヒットとツーベースを打たれているあの強打者を打ちとるためにはどうすればいいだろう、ちょうどそう思い悩んでいたところだ。

「どんな方法だ？」

一虎が小さな声で聞いた。

拓巳は少し顎を上げ、腕組みをした。

「俺の方に打たせることだよ。何とかしてやるからアウトローに思いつきり投げる。」

そう言うとニヤツと笑い、一虎の肩をグラブでぽんと叩いて守備位置に走っていった。

（ちえっ、もつといいアイデアがあるのかと思ったら、俺の方に打たせるだと？俺ってそんなに余裕のない顔してたのか。）

一虎は大きく深呼吸した。

(びびって投げたっていい結果は出ない・・・か。)
キャッチャーからサインが出た。
長打を警戒してアウトロー、拓巳が言ったコースと同じだ。

一虎が首を横に3回振った。

実は一虎がサインを断るときは、首を横に2回振る。

3回振る時は断っているふりをして、そのサイン通りに投げるとい
う合図だった。

キャッチャーがインコースに構える。

これもダメーだ。

一虎が大きく振りかぶった。

拓巳は低く腰を落とす。

キャッチャーがそつとアウトコースに寄った。

『カキーン!』

鋭いライナーがファーストの頭を越えてライン際へ落ちた。

『フェア!』

審判の声に客席からワーツと歓声が起こる。

ランナーが1人ホームイン。

続いて2人目もホームイン、同点だ。

そして3人目が勢いよく走ってきた。

ボールはセカンドの拓巳からバックホーム。

クロスプレー!

一瞬の静寂。

審判が両手を水平に振る。

「セーフ!セーフ!」

またもやワーツという大歓声。

宇都宮が両手を突き上げ、ベンチへ走る。

松尾中学の選手たちが次々と宇都宮に抱きついた。
走者一掃のさよならツーベースヒット。
勝利の女神は今大会屈指のスラッガー、宇都宮を擁する和歌山県代
表松尾高校にほほ笑んだ。

一虎は宇都宮が何度もガッツポーズをする様子を見ながら自陣のベンチへ向かった。

悔し涙を流すチームメイト。

「トラ」

監督が一虎を呼んだ。

「トラ、お前はよく投げた。最終回は他のピッチャーに代えるべきか迷ったが、俺はお前にかけた。最後の球、あれはいいカーブだった。あの球を打たれたってことは、他のどのピッチャーでも打たれているよ。だから胸を張れ、トラ。この借りは甲子園で返せばいい。」

「はい！」

一虎の眼に涙はなかった。

悔しそうな表情もしていない。

チームメイトに申し訳ないという気持はあった。

だが、渾身の一球を完ペきに打ち返した宇都宮に対するライバル心がふつふつと湧きあがってきた。

（この借りは甲子園で必ず返す。）

いつまでたっても興奮さめやらない相手のベンチ。

その中心で笑っている宇都宮の顔を、一虎はきつと睨みつけた。

第6話

リリリリーン。
リリリリーン。

電話が鳴った。

昔懐かしい黒電話。

「はいはい、だれじゃろうかねえ。」

黒瀬道子は台所からエプロンで手を拭きながら出てきた。

白髪交じりの長い髪の毛を無造作に頭の後ろで縛っている。

疲れているのがはっきりとわかるほど重い足取りだ。

「はい、黒瀬ですが。」

「もしもし、大変ご無沙汰しています。私、高山雅彦です・・・1
3年前、一虎君を引き取った・・・」

「かずとら?・・・は、はい、高山さん。・・・あの高山さんです
か!」

道子の声が1オクターブほど上がった。

「ご無沙汰しています。お話するのはあの日以来ですね。」

「まあ・・・、まあ・・・」

竜一の祖母、道子はかなり戸惑っている様子だ。

「突然電話してすみません。実は・・・あの、聞いてますか?」

「は、はい聞いてます。ただもうびっくりしてしまって・・・あの、

一虎は、一虎君は元気ですか。」

「元気ですよ、とっても。」

「まあ、そうですね。元気ですか。それはよかった。大きくなった
でしょうね。竜一も大きくなりましたよ。私の背丈はとうに追い越
されていますね、あの、今部活で野球をやっていますよ、ついで
の間全国大会に行ったりして、とっても元気なんですよ。」

道子は大きな声で矢継ぎ早に話す。

「そうですか。・・・あの、実は、私と家内、それから一虎の3人で五島の方に行ってみようかと思ひまして。」

「・・・・・・・・」

「あの、聞いてますか？」

「はい、聞いてます！・・・ただもうびっくりしてしまつて・・・
そうですか、五島に！で、いつですか。」

「3日後です。」

「ええっ！！」

道子がさらに大きな声を出したため、雅彦は電話の子機を落としそうになつた。

「3日後・・・しあさつてですか？」

「本当に突然ですみません。夏休みが終わつてしまふ前にどうしても行きたいと一虎が言うもんですから。」

すると、道子の声が急にか細くなつた。

「・・・あのう、実は竜一には一虎君のことを話していません。兄弟は誰もいないつてずっと教えていたものですから。」

「私もそうですよ。一虎には竜一君のことやご家族のことを伏せていたんです。つらく悲しい出来事ですから。でも、先ほどおっしゃられた野球の全国大会。あれに一虎も出場してまして、しかも偶然にも一回戦で対戦しているんですよ。」

「まあ・・・、そう言えば、竜一が自分にそっくりな選手がいたつて言っていたけど・・・まさか、それが一虎君だったつてことでしょうか。」

「そうです。」

「まあ、なんとという・・・」

「ものすごい偶然ですね。」

少しの間会話が途切れた。

おそらく道子は今、頭の中を整理しているのだろう。

雅彦は道子が話し出すのを待った。

「あの、それで、お泊まりはどうされますか。こんなボロ家であればぜひ泊まっていただきたいのですが。」

「あ、それは気になさらずに。どこかホテルとか民宿とか適当に探しますから。」

「そうですね……」

道子は少しがっかりした。

「でも、しあさつてには一虎君と会えるんですね。大変だわ、早速今晚、竜一に話さなきゃ！」

「ええ、そうしてください。それでは3日後にお訪ねしますので、よろしく願います。」

「はい、3日後に。」

受信器を下し、しばらく電話を見つめる道子。

はあく大きな息を吐くと、家の中を見回した。

「こりゃ大変だわ。家の中をきれいにしなきゃ。いやそれよりも竜一になんて話そう？そうだ」

、あの子たちが赤ちゃんの時の写真がどこかにあったはずだわ。
道子は眼をらんらんと輝かせ、いそいそと家の中を動き回った。

第7話

「へえ、五島ってかなり遠いと思っていたけど、すぐに着いちゃったね。」

一虎は隣に座っている母・洋子の方を向いた。

「電車や船を使えば1日がかりの旅になるけど、飛行機ならあっという間だもんね。」

「さあ、降りようか。」

後ろの席に座っていた父・雅彦が立ち上がりながら洋子の肩をたたいた。

羽田から福岡までは1時間40分、福岡から五島市の福江空港までは45分、乗り継ぎの時間を合わせても約3時間しかかかっていない。

三人の乗った飛行機はたった今、福江空港に着いたところだ。

荷物を受け取り到着ゲートに立つと、ドアの向こうでこちらに小さく手を振っている女性がいた。

洋子が一虎に頷きほほ笑む。

（あれが、本当のおばあちゃん・・・）

白髪交じりの長い髪。

額や目じりに刻み込まれた深いしわ、そしてやせ細っている体型がこれまでの苦勞を感じさせる。

表情はほがらかで、目はとても優しくそうだ。

「ご無沙汰しています。すみません空港まで出迎えに来ていただいて。あの・・・。」

ゲートを出た3人の方へ、黒瀬道子はゆっくり近づいてきた。

話しかけてきた雅彦には目もくれず、一虎の前に立つ。

何も言葉を発しない。

一虎を頭からつま先までゆっくりと見た後、今度は目線を足から上の方へ移した。

目線が再び顔に戻ったとき、道子の目からぼろぼろと涙がこぼれていた。

「一虎・・・くんね、よく・・・来てくれたわね。大きく・・・なつて・・・。」

道子は右手で両目の涙を拭き、他の二人へ目を移した。

「失礼しました。高山さん、よく五島に来てくれました。」

「洋子です。今まで何の連絡もしてこなかったのに急に来てしまいましたすみません。トラちゃんが夏休みが終わる前に五島に来たいっていうもんですから。あの・・・竜一君は？」

「竜一は今日、五島高校の野球部に行つちよつとですよ。今日からいっしょに練習しましょうって高校の監督に誘われたもんで。」

「あおう、その高校って遠いんですか？」
突然一虎が口を開いた。

道子にはこゝつとほほ笑み、首を横に振った。

「ううん、割と近くにあるとよ。車で5分くらい。」

一虎は訴えかけるように雅彦を見た。

「相変わらずだなあ。五島に来てまで野球を見たいとは。きれいな砂浜がたくさんあるのに。」

「二人ともちよつと待つてよ。今から海に行くって計画していたじやないの。日本一美しいって言われている高浜に。」

洋子が口をとがらせる。

「でも俺、ここの高校がどんな練習しているか、どのくらいのレベルなのかちよつと興味があるんだ。ね、いいでしょ、少しだけ練習をのぞいてみても。」

「じゃあ行きましようか。私が案内するから。」

道子はもう決まったといわんばかりに歩き出した。

「ちょっと窮屈ですけど、我慢してくださいね。」
道子の白い軽乗用車は後部座席の右側の窓が半分しか開かない。
かなり使い古した感じがした。

エアコンも効かないらしく、運転中はすべての窓を開け放している。
日差しは強く汗が止まらないが、車内に吹き込んでくる風は自然の
息吹を感じるようなさわやかさを覚えた。

「さあ、着いたわよ。竜一はいるかしらね。」

グラウンドの脇の駐車場で車から降りた4人は、練習中の野球部員
の中から竜一の姿を探した。

「あら？おらんごちゃっね（いないようね）。」

「俺、マウンドがよく見える方に行ってみる。」
そう言うで一虎は足早に歩き出した。

野球部員は25人ほどいるようだ。

「ナイスキャッチ！ナイス送球！」

球拾いの1年らしき部員たちが大きな声を出している。

マウンドでは、ピッチャーが投げ込みをしていた。

右のオーバーハンド、高校生らしく体つきはしっかりしている。

球威もそこそこあるようだ。

（でも、俺の方がスピードもコントロールも上だな。変化球は、カ
ーブよりスライダーのほうが切れがありそうだ。）

「おい、竜一！来てたのか！」

ノックをしている人にボールを渡していた部員が、一虎に向かって
話しかけてきた。

「監督、黒瀬竜一です。」

「ほー、あれが。なかなかしっかりした体つきだな。早速着替えさ

せる。早く投球を見てみたい。」

「はい。」

監督の名前は野村泰之という。

中学生のときに野球部だったことから、この学校に赴任した2年前から監督を任されている。

はつらつとした感じで、部員や父兄から厚い信頼を受けている。

その部員は一虎の方へ走り寄ってきた。

「竜一、部室に案内するよ。」

「いえ、あの俺、竜一じゃないですから。」

「何言っているんだよ。記憶喪失にでもなったつもりか？みんなお前の投球が見たくて楽しみにしているんだ。何でもいいから早く来い。」

一虎は腕を掴まれ、強引にグラウンドへ入れられた。

第8話

「でも俺、練習着なんてもってないですよ」

「なに？今日からいつしよに練習するって言うとならやろうが。・
・じゃあしょうなか（しかたがない）。ちよつと待っちゃれ」

そういうと、その部員、梶山治は監督の方へ走っていった。

そして二言三言会話をした後、監督がこう言った。

「練習着がないんなら今日は練習せんでよか。でもせつかく来たことやけん、ピッチングは見せてもらうぞ。動きやすか服装はしちよるけんね。まあ、ちよつと肩は温めちよけ。梶山、キャッチボールはしてやれ」

「はい」

梶山は早速部屋からグローブを持ってきて、一虎に渡した。

「ほら、キャッチボールはするぞ」

「はあ」

一虎は仕方なくグローブをはめた。

左利き用のグローブを。

「まあ、一虎君がグラウンドに入って、キャッチボールははじめたよ」

駐車場で道子が驚きの声を上げた。

「もしかしたら、竜一君と間違われているんじゃないだろうか。ほら、左手で投げている。さしずめ、期待のルーキーの腕前を拝見しようってところだろうな」

雅彦はニコニコしながら見ている。

「あなた、竜一君と勘違いされているんなら、わけを話してやめさせた方がいいんじゃない。左手で投げるなんて。竜一君ががっかりされてしまうに違いないわ」

洋子は心配そうに雅彦の目を見つめた。

「でも見ものだぞ。トラは小学生の時から左でもよく投げている。ほら、練習試合が1日に2試合あるときなんか、2試合目は右肩に負担をかけないように左で投げていたじゃないか。あいつ、結構器用なんだよな。」

「そうはいつでも、最近は左で投げているところ見たことがないわよ。ねえ、大丈夫かしら」

「ははは。そんな心配することじゃないだろ。ちょっと投げてみせるだけだよ」

雅彦だけでなく、道子も興味津津という顔をしている。

「どうだ、肩は温まったか？」

「はい、大体は」

「よし」

梶山はノックを続けている監督へ向けて大きな声を発した。

「監督、肩が温まったみたいなので、そろそろどうでしょうか」

「よし、いいだろう。じゃあみんな、こっちに集まれ！」

野村監督は全員を集合させた。

誰もがそわそわしている。

ずっとこの時を待っていたようだ。

「金沢、受けてやれ」

「はい」

金沢は3年生の正捕手。

眉毛が大きく体格はがっちりしている。

「遠慮しないで思いつきり投げていいぞ。」

「はい」

一虎は勢いよく返事をするマウンドへ軽く走った。

途中、駐車場の雅彦達の方を見て笑みを浮かべた。

（父さんが笑っている。今の俺と同じでワクワクしているんだ）

金沢がホームベースの後ろに座ってミットを構えた。

「ストレート、いきます。」

一虎が振りかぶって投げた。

パン！

ボールがミットに収まると、おお〜という声が回りから沸き起こった。

「次カーブ、いきます。」

もう一度振りかぶる。

パン。

またもおお〜という声が回りから聞こえた。

「俺が構えているミットめがけて投げてみる。まずストレートだ。」

金沢はコントロールをチェックするようだ。

右打者のインコース低めに構える。

一虎が投げた。

パン！

高さはよかったがコースが甘く入った。

「次、カーブ」

今度は右打者のアウトコース低めにミットを構えている。

一虎が投げた。

パパン！

ボールはワンバウンドしてミットに収まった。

その後5球金沢の指示通りに一虎は投げた。

「どうだ金沢。」

終始無表情の金沢に野村監督が尋ねた。

「今日はコントロールがいまいちみたいですけど、球は結構速いです。カーブの曲がりもまあまあ。中学生としてはすごいと思います。」

「

うん、そうだな。よし、黒瀬君、今日はもういいぞ。明日からは練習着を持ってこいよ。さあ、他のみんなも元に戻ってノックの続き……ん？どうした黒瀬君、もういいんだぞ？」

一虎はマウンドから降りようとせず、右手にはめていたグローブをはずし、右肩をぐるぐるとまわし始めた。

「おい、黒瀬君、もう・・・」
「俺は」

野村監督の言葉を遮るように一虎が凜とした声で続けた。

「俺は黒瀬ではありません。金沢先輩、すみませんが構えていただけませんか」

金沢は無言を言わせないような一虎の雰囲気、眉をひそめながら、もう一度ミットを構えた。

グローブをプレートの横において一虎が大きく振りかぶる。

(ん？なんかさつきよりも迫力があるな。しかも・・・！)

「おっ、ぐ・・・」

思わずもれた金沢の驚きの声。

パン！！

大きな音とともにボールがミットに吸い込まれた。

一瞬の静寂。

続いてうお〜という低い声がみなのかから洩れる。

「右・・・、聞き腕は右だった！」

金沢はぼかんと口を開け、信じられないものを見るかのように、マウンドの一虎をじっと見つめ続けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7885w/>

竜と虎の甲子園

2011年11月13日23時03分発行